

外国人来訪者が捉えた近代箱根宮ノ下の魅力に関する研究 A Study on Attractiveness of Hakone Miyanoshita by Foreign Tourists in Modern age

○尾沢和樹¹, 押田佳子²
*Kazuki Ozawa¹, Keiko Oshida²

Abstract: In this study we surveyed travel literatures to clarify the attractiveness of Miyanoshita, Hakone that foreign tourists captured in modern age. Conclusion, we grasped that Miyanoshita was evaluated as excellent as overseas mountain resorts due to natural environment and hot springs, and Fujiya Hotel.

1. 背景及び目的—神奈川県箱根は良質な温泉が噴出することより奈良時代より知られる観光地であり、江戸時代には箱根七湯を抱える観光地として賑わった。近代には外国人専用の観光地として整備され、これが上述の温泉観光と相俟って現代まで継承されている。

現在の箱根は、日本人に加え、多くのインバウンド観光客が訪れるが、今後も観光発展を推進させる中で、箱根本来の姿を見直すことは重要と考えられる。そこで本研究では、近代箱根観光の中心となった宮ノ下に着目し、外国人来訪者の視点から見た宮ノ下の魅力を抽出することを目的とする。

2. 研究方法—本研究の調査概要を Table1 に示す。

3. 結果及び考察—文献調査より、記載された時代、観光地ごとの傾向を Table2, 各観光地の位置関係を Figure1 に示す。調査結果は記載内容より「近世以前」「近代観光黎明期」「宮ノ下接続期」「小田原電気鉄道開通期」の4期に分類できた。さらに、外国人来訪者による宮ノ下の記録を Table3 に示す。以降、Table2, Table3 に従い結果を述べる。

3-1. 外国人来訪者による箱根観光の傾向—Table2 より、「近世以前」には湯本、宮ノ下、畑宿、元箱根、芦ノ湖を訪れる外国人来訪者が多かったが、その後、「近代観光黎明期」になると医師のベルツによって、箱根での療養や保養が唱えられたことにより、リゾート開発が進められ、特に、以前より温泉地であった宮ノ下への来訪者が飛躍的に増え、ここを起点に、芦ノ湖、芦之湯を訪れる来訪者が増加した。さらに、馬車鉄道が宮ノ下まで延伸した「宮ノ下接続期」には、交通利便性の向上により、外国人来訪者が宮ノ下のみに集中する傾向みられた。以上より、明治期以降、外国人来訪者による箱根観光の中心が宮ノ下にあったことが明らかとなった。そこで、以降は、外国人来訪者

Table1 Outline of the survey (調査概要) (This is original table by authors)

調査方法	文献調査
調査期間	2019年5月1日～2019年9月24日
調査対象	「外国人のロクス・アモエヌ『箱根』—箱根-明治・大正の旅行記から—」 「富士屋ホテル八十年史」他11件
調査内容	箱根を訪れた外国人の手記をもとに観光地や行動等を抽出した

が残した記録をもとに、当時の宮ノ下の魅力を述べる。

3-2. 外国人来訪者が捉えた宮ノ下の魅力

Table3 より、宮ノ下について外国人来訪者が残した記録は全部で19件あり、うち、「近世以前」が2件、「近代観光黎明期」が12件、「宮ノ下接続期」が5件であった。全時期に共通して、山岳の風景や清涼な空気など豊かな自然環境に関する記述が14件見られ、ボーヴォワール伯爵は宮ノ下を「バーデン・ハーテン」、ミットフォードは「タンプリッジ・ウェルズ」といった海外のリゾートに例えるほど高く評価している。次に宿泊先に着目すると、アーネスト・サトウやA.G.S. ホーズをはじめ富士屋ホテルに関する記述が6件見られ、「日本で最高のホテルの1つ」のように高く評価されている。1878(明治11)年に山口仙之助により創業された富士屋ホテルは、1893(明治26)年に老舗旅館・奈良屋旅館との間に、奈良屋旅館は日本人客専用、富士屋ホテルは外国人専用、とする宿泊協定を締結した。これにより、「宮ノ下接続期」以降、外国人来訪者は富士屋ホテルを核とした観光行動をとらざるを得なくなったことで、先に述べた宮ノ下一極集中化が起こったといえる。また、温泉に関する記述が9件見られ、ベアトの「ここで気力と体力とを回復」や、クロウの「風呂は旅館の特別の呼び物」のように、外国人来訪者が温泉を療養・保養のためのものと捉えたことが伺える。

箱根に至る交通は、「近代観光黎明期」のアーネスト・サトウの記録では、「人力車」「徒歩」「駕籠」を用いたとあるが、「宮ノ下接続期」に訪れたバジル・ホール・チェンバレン、W.B. メイソンは「馬車鉄道」「人力車」「馬車」を用いたとあり、短期間の交通発展より、宮ノ下が身近なものへの変化したことが捉えられた。また、小田原電気鉄道が開通したことにより、宮ノ下がより一層の一極集中を招く結果となった。

4. まとめ—以上より、外国人来訪者が捉えた近代箱根宮ノ下の魅力は、山岳リゾートにふさわしい豊かな自然環境と伝統的な温泉によって成立したことに加え、

宿泊協定や交通発展に伴う富士屋ホテルの繁栄とともにあったことを捉えた。この観光形態は、外国人来訪者の一極集中を招くこととなったが、他方、海外の有名リゾートに並ぶほどに、景観、ホスピタリティともに高く評価されたことは、近代日本が持っていた観光力の高さの現れと言えよう。一方で、この一極集中化は、現代にオーバーツーリズムという形で継承されているといえ、この改善のためにも「近世以前」および「戦後」の観光地に目を向ける必要があると考える。



Figure1 Overview of the study area (This is original Figure by authors)

Table2 tourist spots in each period (各期の観光地)

	箱根観光地(件)											文献数
	湯本	塔之沢	宮ノ下	芦之湯	煙宿	元箱根	木賀	仙石原	姥子	大涌谷	芦ノ湖	
近世以前(1691年ー1868年)	5	1	5	1	5	7	1	0	0	0	5	30
近代観光黎明期(1869年ー1888年)	8	5	26	16	3	13	4	6	2	5	20	108
宮ノ下接続期(1889年ー1935年)	8	2	36	9	0	2	6	2	3	6	10	82
小田原電気鉄道開通期(1936年ー1957年)	0	0	8	0	0	0	0	1	0	0	3	12
小計	21	8	75	26	8	22	11	9	5	11	38	232

(This is original table by authors)

Table3 travel literatures by Foreign Tourists (外国人来訪者による宮ノ下の記録)

(This is original table by authors)

	外国人来訪者		宮ノ下の記録	
	近世以前	明治黎明期	宮ノ下接続期	近世以前
近世以前	ベアト(1867年) ^[1]	明治黎明期	宮の下温泉と宮の下村は、箱根山でも奥の方の魅力的な溪谷にある。海拔にしても相当の高さである。空気が澄んでいてさわやかである。鱒の棲む清冽な小川が、谷間の一番深いところをとうとうと流れ下っている。病む人もくたびれた商人も旅人も、ここで気力と体力とを回復し、その美しい景観に心を慰める。誰もここ以上にすばらしい場所があるなどとは思わない。	近世以前
	ボーヴォワール伯爵(1867年) ^[2]		日本の貴族階級のバーデン・ハーテンで、寒い季節には人気がなく、夏には浴客で一杯になる。	
	ミットフォード(1869年) ^[2]		宮ノ下は山々に隠れた全くすばらしいところである。この小さな集落は、全く温泉宿で成り立っており、それらの浴場はまた宿屋や店も営んでいる。そこではとてもかわい。趣に富んださまざまな種類の桶の箱や寄木細工、玩具などを販売し、浴客は家族への土産物としてそれらを買って行く。ここは社交的な温泉場で、イングランド南東部の鉱泉場として有名なタンブリッジ・ウェルズの日本版と言えるだろう。これほど静かな所は初めてである。	
	モリソン(1870年) ^[3]		村は実質的に奈良屋で構成され、少数の散在する家屋と、今でも宮ノ下の特徴である木彫りの作品を販売するための1つまたは2つの店があります。	
	アーネスト・サトウ(1871年) ^[4]		当地は温泉で有名だが、横浜から十七里半のところに位置する感じのよい保養地である。横浜から東海道を「人力車」が馬車を利用して三枚橋まで走らせ、そこから「人力車」で塔ノ沢へと向かい、最後に徒歩か「駕籠」で険しい登りをこなして、一日のうちに容易にたどり着ける場所だ。	
	サンドウィズ(1871年) ^[2]		宮ノ下のお茶屋は今では外国人たちの好む保養地(resort)であり・・・大きなお茶屋は最も快適である。なぜなら、外国人たちの習慣は理解され、しかも主人たちはとても礼儀正しく親切なのである。	
	アーネスト・サトウ ^[2] A. G. S. ホーズ(1871年) ^[2]		温泉で知られる、すばらしい保養地である。ルート：小田原から塔之澤まで人力車。そこから徒歩、駕籠を使えば横浜から一日で到着することができる。旅館：フジヤ(洋式の大きな建物。食堂やビリヤードがある)、ナラヤ(魅力的な日本式の建物。椅子やテーブル、ベッドなど洋式の品々が備わっている)。	
	ウェット(1874年) ^[2]		こよなく美しい。まるで絵に描いたような風景の中にあった。	
	クロウ(1881年) ^[5]		横浜や東京の大多数の居留者とその家族は、景色がよくて健康的な土地柄にひかれて、夏と飽きには宮ノ下に来る。ここは、山の急流を覆う木立がこんもりと密に茂った深い峡谷の上に位置している。この谷に沿って、何マイルも先まで見渡すことができ、ずっと先には遠い海原が、もう一方には高い乙女峠がある。まわりの山々は火山で数多くの硫黄の源泉があり、湯は竹の導管であちこちの温泉場に引かれていて、風呂は旅館の特別の呼び物となっており、広々として清潔なので、誰もが一日中時間に関係なく入りに行く。	
	不明(明治初期頃) ^[2]		さわやかな空気、すばらしい景観、そして大きなお茶屋と温泉を兼ね備えた保養地。	
明治黎明期	不明(1885年) ^[6]	宮ノ下接続期	宮ノ下の優れているところは、高地と一層涼しい気温である。宮ノ下は中国にいるヨーロッパ人を引き付ける力がある。中国の滞在地から女性と子供が夏の間にこちらへ送られる。	明治黎明期
	不明(明治初期頃) ^[2]		多くの外国人が保養とレクリエーションを求めて、山中にある宮ノ下と堂ヶ島を訪れ、彼等はそこの人びとに大歓迎され、厚遇される。ホテル、あるいはお茶屋はとても美しく、主人たちはできるかぎりの世話をしてくれるから、外国人客は快適に過ごすことができる。大名やその家来たちが常にここを占拠した時代は去り、今では外国人が最良にしてくれることを望み、それを大事にしていますと彼等は素直に言うのである。	
	不明(1885年) ^[6]		澄んだ空気やきれいな土地、そしてこのような快適な場所で休暇を過ごすことができるなら、自分がまるで楽園に居るように感じるのである。	
	不明(明治中期頃) ^[6]		旅行記の著者達は、宮ノ下の名前を挙げることに共に次の点を指摘した。それは、暑さや汚れからの逃避、美しい景色、そして社会階級的(金銭的)に比較的均質な(外国人仲間の)環境の中で知人と遭遇する機会からの逃避である。	
	バジル・ホール・チェンバレン ^[2] W. B. メイソン(1889年～1891年) ^[2]		多くの理由から、とても快適な保養地である。清浄な空気、優れたホテルに加え、そこから長距離、短距離を問わずさまざまなおもしろい散策が楽しめる。またチェアーや特製の大きな駕籠に乗って行くのもいい。さらには、贅沢なお風呂もある。ルート：国府津まで東海道線を利用して、そこから湯本までは馬車鉄道、人力車、馬車に乗り、さらに宮ノ下まで人力車が徒歩で来れば、横浜から4時間半で来ることができる。途中で料金所がある。旅館：フジヤ、ナラヤ(共に洋式の、大きなホテルである) 宮ノ下は温泉、乾いた空気、アクセスの良さ、そして洋式のホテルがある点で箱根よりも優れている。冬に関しては宮ノ下に利点があることでは一致している。この季節は誰も箱根に行くこととは思わないだろうが、宮ノ下は一年間を通じて快適な所である。	
	ベルツ(1894年) ^[7]		宮ノ下を去るのは残念だ。いまだかつて、日本でこんな美しい夏を過ごしたことがない。おまけに天気の良い、からっとした夏、よいホテル、愉快的な交際仲間。	
	ジャクソン(1899年) ^[3]		宮ノ下は、休日に横浜と東京の住民が集まる療養所であり、その素晴らしい魅力は間違いなく日本で最高ホテルの1つであることを誇りとする富士屋ホテルです。	
	デル・マー(1899年) ^[3]		宮ノ下は日本の場所の1つで、横浜から4時間半、東京からさらに1時間で行けるので、港や首都の住民に人気のリゾートです。多くの自然な利点に加えて、近代的な衛生設備を備えた一流ホテルの日本では珍しい魅力があり、ヨーロッパでも日本スタイルでも、宿泊施設と食事を国内で提供しています。	
	ファナー(1904年) ^[3]		宮ノ下は、旅行者のラブリティ化の場で、最も発見可能な理由は、ホテルの優秀さであり、そこでは料理とセラーが判断を和らげ、くすみを行使するように計算されます。宮ノ下は丘の高い袋小路にあります。すべての周りには、息苦しいほどの新緑の重みがかかっています。あらゆる場所の見通しは、緑豊かです。	

5. 参考文献

【参考文献】

[1] 横浜開港資料館, 「F. ベアト写真集 1 幕末日本の風景と人びと」, 株式会社明石書店, pp. 70-87, 2006 [2] 箱根町立郷土資料館, 「外国人の見た Hakone-避暑地・箱根の発見」, 箱根町, pp. 7-53, 1997 [3] 山口堅吉, 「富士屋ホテル八十年史」, 株式会社山形印刷所, pp. 4-611, 1958 [4] アーネスト・サトウ, 「明治日本旅行案内 東京近郊編」, 株式会社平凡社, pp. 202-239, 2008 [5] アーサー・H・クロウ, 「クロウ日本内陸旅行」, 株式会社雄松堂, pp. 223-277, 1984 [6] A.H. パウマン, 「外国人のロクス・アモエヌス『箱根』-明治・大正の旅行記から」, BookWay, pp. 15-98, 2012 [7] トク・ベルツ, 「ベルツの日記 第一部上」, 株式会社岩波書店, pp. 11-154, 1951 [8] 生方良雄, 「箱根登山鉄道 125 年のあゆみ 天下の険に挑む日本屈指の山岳鉄道」, JTB パブリッシング, pp. 36-56, pp. 171-174, 2013 [9] 野瀬元子, 「日光、箱根を対象とした観光地形成過程についての考察-観光資源、交通環境と初期段階の外国人利用の差異に着目して」, 東洋大学大学院紀要, pp. 31-56, 2008 [10] 西村真, 渡辺貴介, 安島博幸, 「我が国近代リゾート地の発展過程に関する研究」, 第 6 回日本土木史研究発表会論文集, pp. 218-222, 1986 [11] 服部陽太, 杉本興運, 太田慧, 菊池俊夫, 「箱根・元箱根における観光と空間構成」, 観光科学研究, pp. 59-66, 2016 [12] 斎藤功, 「わが国最初の高原避暑地宮ノ下と箱根：明治期を中心に」, 筑波大学人文地理学研究, pp. 133-161, 1994 [13] 十代, 田朗「近代日本における『避暑』思想の受容と普及に関する研究」, ランドスケープ研究, pp. 105-108, 1996 [14] トク・ベルツ, 「ベルツ日記 第一部下」, 株式会社岩波書店, pp. 7-168, 1952 [15] トク・ベルツ, 「ベルツ日記 第二部上」, 株式会社岩波書店, pp. 11-208, 1953 [16] トク・ベルツ, 「ベルツ日記」, 株式会社岩波書店, pp. 7-207, 1955 [17] エリザ・R・シドモア, 「シドモア旅行記」, 株式会社講談社, pp. 220-243, 2002 [18] E.W. クラーク, 「日本滞在記」, 株式会社講談社, pp. 24-29, 1967 [19] ケンペル, 「江戸参府旅行日記」, 株式会社平凡社, pp. 161-166, 1977 [20] アーネスト・サトウ, 「日本旅行日記2」, 株式会社平凡社, pp. 125-166, 2008